

---

# 心の扉

紫苑 鎌鼬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心の扉

### 【Nコード】

N3288BA

### 【作者名】

紫苑 鎌鼬

### 【あらすじ】

黒い毛並みを持つ狐が、矢にやられ怪我をおい、まよいこんだのは人間貴族の中であだなされる“凍結の姫君”の屋敷の庭であった。そこで狐は彼女と出会う。しかし、凍結の姫君とよばれているような人柄ではなく、誰もを魅了する天使の笑みを浮かべる喜怒哀楽あふれる貴族の姫だった。が

狐に対して天使であっても人間に対しては凍結の姫だった・・・。

そんな姫の名を狐はふと、呟く。「アクアリア・・・か。」と。

狐だけど狐じゃない彼と二つの性格？を持つ彼女のダブル主人公の

お話です。

## 第一章 狐編 出会い

グサッ

「クウヴウー」

一匹の黒い狐の前足（右側の足）に一条の矢が射抜いた。

「よし、しとめたぞ!!」

遠くでおどましい人間の歓喜する声が響いた。

黒狐は痛みにくらえながら矢をくわえて引き抜く。

そして逃げた。

森の中を全力で駆けていく。

走るたびに、痛みが全身を駆け巡った。

だが、とまるわけにはいかない。

「っ!？こら、まちやがれ!!」

「・・・おい、にげられるぞ!」

「はやくおいかけるぞ、折角の狩った獲物が・・・」

人間の声が遠くなるのが分かる。

それが完全に聞こえなくなったとき、

狐は、隠れやすい茂みの中に体をうずめた。

前脚の右足に激痛が走る。

「クウウウンッ」

傷口を何度もなめてはそれを耐えた。

そんなときだ。

「まあ、声が聞こえたと思ったら・・  
こんなところに隠れてたのね。」

一人の人間の女が、茂みを分け、狐を見つけた。  
水色の髪をした、翡翠の瞳を持つ人間の女だ。

「ヴヴウウ・・!!」

来るな!! 近寄るな!! おぞましい人間め。

狐は恨みと怒りを込めたまなざしで  
女を見つめる。

そして、後ろに退こうと立ち上がったとき、  
痛みが走った。

「クヴウウ”ー”!!」

がくつと崩れ落ち、たまらず体を地べたにうずめた。

「・・っ!

け、怪我してるじゃない!!  
そんな体で無理しないで。私が治してあげるから。  
私はこわくないわ、ね?」

彼女は狐の負った怪我を見て青ざめた。

そして、狐をいたわるような心配そうな表情をし、  
優しそうな声色で近づいてくる。

最後は本当に何の裏のない純粹に救いたいという気持ちの現れである・・・

天使 のような 笑顔 で微笑みかけた。

百面相をする忙しい女だなと思う反面

狐はその人間の女の微笑に衝撃を受けた。

「・・・!？」

狐が衝撃を受けている間に女は、狐を腕に抱いた。  
びくっと反射的に狐は体をこわばらせる。

「・・・大丈夫、私はあなたに危害を加えたりしないから」

女は優しく狐の体をなでながら、怪我をしている脚に手をかざした。

スシャアアア

女の手から光があふれ出した。

「・・・!」

狐は目を見開かせた。

体からというより、前脚から痛みが徐々に遠のいた。

「・・・ふう。」

女が一息ついて、かざしていた手を下ろした。

「・・・完全に、完治させることは、できないけれど、もう激しい痛みは襲ってこないはずだから、ね？」

女は疲れをこらえたような天使の笑みを浮かべた。

狐を・・・思いやる、救いたいという気持ち がひしひしと伝わってくる。

「・・・」

狐は、この変わった女をじっと見つめた。

自分を救ってくれた人間、

邪な考えを持たない純粋な人間――。

何故、この忌々しい黒に染まった狐を助けたのだろうか。

「――アクアリア嬢、どこですか」。

茶の時間くらい一緒にいてくれたっていいじゃないか

アクアリア嬢――」

誰かを呼ぶ声と、同時に少し遠くから近づいてくる足音。

「・・・はい、今います」

その声の方角に振り向いて、先ほどまで天使の笑みを浮かべた女が冷やかな何の感情ももっていない声で応えた。

そのときの、表情は凍てついたように冷たく冷静すぎるものだった。

「・・・！」

しかし、それは一瞬だった。

「ごめんね？もっと一緒にいたかったんだけど、邪魔が入ってしまったわ。ここはね、私の屋敷の庭なの。ずっとここにいていいから。ほかの動物たちも住み着いているし。じゃあ、またね」

すぐにまた天使の笑みを浮かべて彼女は狐の頭をなで、小声でなぜか謝罪してくる。

あの感情のない表情など嘘のようだ。

そうして彼女は急いでその場を去っていった。

「アクアリア嬢！探しましたよ！なんで庭に勝手に行くかなー、僕を誘ってくれれば喜んでいくのに」

その場からでも、女を捜しに着たらしい若い男がそうあきれた風な物言いで彼女を責めた。

「何故、庭に出ようなどと、あなたを誘わなければならないのですか。」

そもそもお茶の時間など、誘われてもいませんが？？」

さっきの感情のこもっていない声。

あるとしたら、男に対する拒絶と苛立ち。

彼女はとても冷静にそう彼に言葉を返していた。――別人のようだ。

「冷たいなあー。」

そこは、・・客人として来てる僕への気遣いとかでお茶の時間くらいもてなすのが思いやりってやつだろう？」

若い男はその冷たい言葉に慣れてるのか



彼女にそう、問いかける。だが、少し言いにくそうな声色だった。

「それは私の役目ではありません。

私の妹では不満がおりですか？

今日のお茶の時間は妹のフレアリンがもてなすよう計らっていたのですが

何か粗相でも？？」

彼女のほうはというと、これまた冷静に応えている。

なにも動じていないような響きを持っていた。

本当に、さっき怪我を治してくれた天使のような女だったのだろうか？

と疑問に思うくらいだ。

「いや、フレアリン嬢は立派だし完璧だったよ。

でも、今日は君がいいんだけどなあー。」

「私にしてほしいならそうと、そのときにおっしゃってください。

フレアリンがかわいそうではありませんか。

エメラルド様の気まぐれのせいで、

今頃フレアリンは粗相をしたかもしれないと青ざめていたらどうするのです？

私には、あなたのいう、

思...いやりも気遣いも心得ていないのに

そんなことになってたら・・・」

言葉からしたら、彼女は不安を抱えてるように聞こえはいいが声色はいたって冷静だ、少し皮肉も入ってるように聞こえる。

「じゃあ、今から一緒にフレアリン嬢のところに行こう。

そうすれば、いらぬ杞憂だったと思ってくれるよ？」

「・・・そうですね。そうしましょう。  
じゃあ、さっさとすませましょうか」

彼の意味ありげな声色に心底嫌そうな声で彼女は応えた。

そうして、二人は去っていった。

狐は、しばらくして、

「アクアリア・・・か。」

と、ぽつりと意味ありげに呟いたのだった。

――こうして、二人？の運命の歯車が動き出した。

## 第一章 狐編 出会い（後書き）

狐視点のような傍観者視点のような表現の仕方ではないです。  
狐視点です。

次回は・・・アクアリア嬢視点で話を進めます。

**狐編 二つの表裏と・・・(前書き)**

アクアリア視点です。

## 狐編 二つの表裏と・・・

さわやかな春の日差しが、庭を輝かせていた。

今日は、珍しい黒い毛並みの狐を見つけて治療した。

とても警戒心の強い子だった。

その子になついてほしくて、もっとそばにいたかったのに、

今日は思わぬ邪魔がはいってしまった。

「アクアリア嬢、なんでそんなに僕に冷たいの？

僕のことくらい？」

今、一緒に屋敷に戻っている、義父の仕事の助手をしている貴族のエメラルドだった。

とても若く、このとおり軽いやらんぽらんみたいな性格だけど、実績のある優秀な人らしい。

何故そんな人が、今日、客人としてもてなされ、

凍結の姫とあだなされるこの私といえるのかとても不思議なくらいだった。

「・・・正直な思いを打ち明けても?？」

軽くすんなりと甘い言葉がはけるこの人のせりふ一つ一つに苛立ってして仕方がないのだけれど、ここはひとつガツンといったほうがいいかもしれない。

私は感情を表に出さず、そう伺った。

「うん。正直に言ってる？」

彼は私の思うことなど悟っていないのか笑顔でそう、うなずいた。

「・・・正直言って、」

「ん？正直言って・・・？」

私がひとつ間を空けると・・・

彼は鸚鵡返しに好奇心旺盛な緑の瞳で聞いてきた。

「私はあなたのことが大嫌いです」

・・・よし、よくいえたぞ、私！

さも嫌そうに私はきっぱりと正直に冷静に言った。

「・・・僕、そんなに君に嫌われてたの？」

彼は半分私の答えに予想はしていたらしいが

“大”がついたせいとか、めんをくらった表情をしていた。

一体なんでどうして？・・・のような問いたそうな顔だ。

「私の態度で、うすうすお気づきにはなりませんでしたか？」

てっきり、お気づきの上でこういう会話をしてると思ったのですが」

そう、私が抑揚のない声で問いかけると、

「え、ええー！そんなことないって。僕は君に好かれたくて・・・  
好かれたくて、・・・そんな言葉は聴かなかったことにして  
（好きになんて絶対なれない、これ絶対）

「あそこにフレアリンがいます。さっさと行きますよ」

「え？ええ！？ちょ、僕の話・・・」

私は足早とフレアリンの方へ歩いていく。彼の抗議なんて無視だ。

すると、フレアリンも私とエメラルドに気づいたようだった。

屋敷の入り口付近でおろおろしていたフレアリンの顔がぱつと輝く。

「ああ、アクア姉さま！！エメラルド様！！  
わたくし、探しました！」

私を見て駆け寄ってきた。

この明るい彼女は“フレア”だ。

「私もよ。」

彼のきまぐれで、フレアに迷惑をかけたのではないかと。」

「いえ、違います！アクア姉さま。わたくしがいたらないばかりに・  
・。」

私の言葉に強く否定してフレアは自分を責めた。

「完全にエメラルド様のせいです、責任を取ってください」

私は彼に向き直りそう、冷たく突き放した。

「う、うん……。あのね、フレアリン嬢、君が悪いわけじゃないんだよ。」

君はすごく完璧で思いやりがあつてすばらしかった。」

彼は私の冷気に怖気づいたのか、先ほどよりも弱気な声でフレアを口説くように褒め始めた。

「わたくしが・・・？完璧？そんな、わたくしはまだまだ未熟者で・・・」

「そんな！未熟だなんて。」

すぐ立派で本当にミスなんてひとつもなかったよ！  
もう、どこにでもお嫁さんに出せるぐらいの身のこなしでさ！  
それに、気配りも良く出来てて話も面白いし華やかで・・・」

・・・こんなのきいてられないわね。

そう、私は思った。

私の妹フレアリンは私と同じくして、  
自身の個性と反対の性格を演じている人格者だ。

私は、義父の

“お前は感情を表に出すな、はしたない”

その言葉を幼いころに聞き、私は表に出すことを抑えた。



心の扉をきつく閉め、警戒心と冷静さで凍てついた私の心。

それは社交界での私を守るとりでとなった。

それがアクアだ。

一方、心を許したもののへと向ける感情の表れが、リア。

それは、義兄、弟妹、と動物に向けるだけと、限定している。

けれど、私は演じるというよりも、

自分は二人いると思い、切り替えてるだけだと考えている。そうすれば辛い。

「では、私はこれで」

私はその場をそっと離れた。

そして、屋敷に入り、自分の部屋へと行こうとすると、

「・・・リア」

そう、小さく、それでいてはつきりと呼び止める声がした。  
それは・・・

「イタチ兄様・・・」

私は振り返って呼び止めた義理の兄を見つめた。

「リア、その・・・すまない」

銀髪碧眼の義理のお兄様は義理の父の実の息子だった。

その彼が言いにくそうにそう呟いた。

彼はわりと冷静でおとなしい性格の持ち主だった。

「え、何が、ですか??」

私はふんわりと笑って見せた。

イタチお兄様は義理の父とは違って信頼が出来るしやさしい。

「エメラルドのことだ。あいつが勝手に庭に行っただろう。引き止めはしたんだが・・」

本当にすまなさそうにしているイタチお兄様に私は苦笑した。

「仕方ないですよ、

ああいう人なのはもう、仕事上分かりきっているから」

「そうか？だがしかし・・

あの庭はリアにとって癒しの場だろう？」

私を気遣うようにかけてくれる言葉はとてもうれしい。

しかし、お兄様はまだ、私に対しての罪悪感があるようだ。

「まあ、そうですけどお・・。

ーじゃあ、お兄様！ー頼みごと、していいですか？」

私は、すぐる目で兄を見つめた。

「ああ。聞ける範囲ならいくらでも。」

彼はうなずいた。

少しくらい難しいことでも彼は・・・きつと叶えてくれる。

私は、そう確信していた。

彼の罪悪感はいくら小さなことがきっかけとはいえ、なかなか消えない。

特に私に対しては。――彼にとっての父の言葉のことがあるから、余計に。

これを利用するのは良心をいためるけれど、・・・私は――

「私、さっき、怪我をしていた黒い狐を治療してあげましたの。

その子、とても警戒心が強くて・・・

まだその子にこのことは話していないのだけれど、もっと仲良くなれたら・・・

私、使い魔の契約をしたいの。許して・・・くれる？」

私は兄を見上げ、尋ねてみた。

あの狐を見て、すぐに助けたいと思った。そばにいたいと思った。

それは、離れた今も考えていることで、この気持ちは今も薄まったりしない。

「・・・黒狐を？」

彼はやはり目を見開いて驚いていた。

彼は王直属の魔法騎士の称号を持っていた。今は春の休暇中で家にいるけれど。

彼はとても魔法に詳しく、もちろん、今言っただけの私の契約のことも知っている。

身内の魔法のことにに関してだから、彼はいつも自分に相談して来いと言っていた。

「そうなの。その子、とても魔力を感じるし・・・もっとほかにも・・・」

「まだはやいとおもっていたが・・・リアの願いなら仕方ない。もし、本当にその狐も了承するなら、一度俺に会わせてくれ。

リアの使い魔になるのだから俺に見定める権利なんてないんだが・・・」

「よかった、そうしてもらえて。

許しはそれだけでよかったの。

私のお願ひ、聞いてくれてありがとう、イタチお兄様」

私は本心から安堵した。

彼は、聞けないなら聞けないとはっきり答えるような人だからだ。そしていつも・・・正しい。

「お兄様、これで、エメラルド様との件はチャラだからね？」

「ああ。ほんとに悪かったな、リア。

言いたかったのはそれだけだったんだ。

じゃあ、俺はエメラルドにきつく言っとくから。

また夕食のときにな」

「うん。エメラルド様にきつく言っといてください。

私は邪魔されたくありませんでした、と。」

「ああ。次は俺も必ず止める。じゃあな」

イタチお兄様は私に背を向けて去っていった。

そのとき、彼の背中には、白い毛並みの赤眼の瞳を持つ鼬フウトが張り付いていて、私を鋭い目つきで見つめていた。

それは彼の使い魔だった。

彼と血の契約を結んだ、生涯のパートナー。

私も、ああやってそばにいる子がほしい。

あの、孤独そうなあの子と、・・・一緒に・・・

私はそう切に願った。

願わくば、あの子も同じ思いであるようにと。

## 狐編 二つの表裏と・・・(後書き)

### 【イタチとエメラルドの後日談】

「おい、探したぞ、エメラルド」

ものすごい鋭い目つきでイタチはエメラルドをにらんだ。

鼬のフウトもイタチと同じくして鋭い眼光をエメラルドに当てる。

実はエメラルド、イタチと同じく魔法騎士の称号を持ち、イタチの戦友だが

先ほどこっぴどくアクアリアに痛い言葉を投げられたため、弱気だった。

「な、なに・・・イタチ。」

頑張って頑張ってフレアリンを褒め称え、

フレアリンがようやくの末、誤解を解いてくれたときにはもうアクアリアの姿がなかった。

疲れ果てたエメラルドには、怒りをたたえるイタチの凄みにいつものように陽気に応えることはできなかった。

「お前、何故、俺との茶の時間に勝手に庭へ出たんだ。

俺は待ってろって言っただろ。それを無視して

リアを探しに行きやがって・・・何様のつもりだ」

そう静かに激怒するイタチにいつものエメラルドなら

何様って・・・僕はお客様だよ？

って応えるだろうがそんなこといえる気力はあるはずもなく

「だって・・・僕、すぐにでも彼女と話したかったんだよ・・・」

彼の激怒もあって

そのまま素直な気持ちをエメラルドはイタチに言うしかなかった。

「それは逆効果だといつも言っているだろうが。

だからリアは心を開かないんだ。

お前、そうとう嫌われてるぞ。次はもう邪魔しないでほしいといっていたぞ。

俺としても邪魔はさせないつもりだから、覚悟しとけ」

イタチのペースにエメラルドはどんどん乗せられていった。

エメラルドの心はもうずたずたのぼろぼろだ。

「ええ、そんなぁー」

僕、話したかっただけなのにー」

彼は小さな子供のわがままようにわめいた。

「だけなのに・・・じゃない！

だいたいおまえはだな・・・」

そうしてイタチの説教ともいえる話は長く長く続いた。

フレアリンは

「・・・わたくしがあそこまで粘らなくてもよかったかも・・・」

と、同情するぐらい、

エメラルドはイタチにこっぴどく言われ続けたのであった。

終わり。ちゃんちゃん。

「うううっつ、アクアリアちゃあーんっつ!!」

そう、エメラルドはなみだ目で叫び、  
アクアリアに相当嫌われていたことを自覚するしかなかったのだっ  
た。

「フッ、当然の報いだわ」

遠くからエメラルドの叫びを聞いて、  
アクアはそう呟いたという。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3288ba/>

---

心の扉

2012年1月8日20時45分発行